法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-03

「皇国の使命」ー国定教科書に見る世界の中の日本

Mizobe, Atsuko / 溝部, 敦子

(出版者 / Publisher)
法政大学国際文化学部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
異文化 / 異文化
(巻 / Volume)
5
(開始ページ / Start Page)
141
(終了ページ / End Page)
165
(発行年 / Year)
2004-04-01
(URL)
https://doi.org/10.15002/00002102

Hosei University Repository

「皇国の使命」
ー国定教科書に見る世界の中の日本

溝　部　敦　子

1　はじめに

墨塗り教科書を経験した日本では、戦前の軍国主義／帝国主義は国定教科書を媒介に上意下達で培われたという認識が広く国民の間で共有されている。したがって、これまでの教科書研究は主にこうした教育と政治との生々しい関係の記憶に立って行われ、政府が国体＝天皇制支配体制を維持し、国家に有為の人材を育成するためいかに腐心してきたか、そのため教科書がいかに大きな役割を果たしてきたかを明らかにすることに重点が置かれてきた。

こうしたアプローチの背後には、国家と国民を上下、あるいは対立の関係で捉える固定観念が基本に横たわっている。すなわち、「御上」という名の国家が保守勢力として一方にあり、これに抑圧された国民と国民の不満を代弁する左翼の活動家やリベラル派の知識人がもう一方にあるという図式である。こうした図式が戦前の日本社会の一面をとらえているにすぎず、現実がそれほど単純でなかったであろうことは容易に想像される。にもかかわらず、少なくとも教科書に関しては、この図式を暗黙の了解とし、思想善導による社会秩序の維持というお馴染みの枠組みの中で問題が論じられてきたように思う。

しかし、教育は、天皇の権威の上に築かれた明治憲法体制の維持装置、社会の安定を揺るがす過激な勢力に対する防波堤としてだけ機能していたのだろうか。また、文部省と国民との関係は、前者が後者を啓蒙、訓導するという一方的なものだったのだろうか。

例えば、一般的なイメージと異なり、最初の国定教科書（1904年度か

Hosei University Repository

ら使用）が封建的価値観から比較的自由で、バランスの取れた愛国主義に貫かれていたことはよく知られている。外国人ジャーナリストも合格点をつけるくらいの出来映えだったが、[1] 逆に保守派の反発を買うこととなった。特に、日露戦争の勝利により国民の間に自国に対する自負心が高まり、同時に戦後不況などで社会不安が深刻化、社会主義が勢いを増すと、反動的な改訂を求める声はさらに強くなった。義務教育年限の延長（1907）もあって、第二期の国定教科書が出たのは大逆事件の前後であったが、そのこともあってか、教科書研究では、主に社会の左傾化、西洋化に対抗するという側面が強調され、民族意識に目覚めた国民の側からの愛国主義的要求の方はあまり深く追求されずに来たように思う。その結果、無邪気な子供を対象に従順で盲目的な愛国者の大量生産が国家主導で行われたというイメージが広まることとなった。だが、こうした反動的あるいは愛国主義的な教育は、本当に、政府から国民に一方的に押し付けられ、国民はそれを否応なく受け入れていたのだろうか。

このように、これまでのアプローチでは国内事情のみが考慮され、対外関係と合わせて教科書が分析されることはあまりなかったように思われる。また、対外関係から生ずる国民の自然な感情としてのナショナリズムも十分考慮に入れられて来なかった。そのため、日本人の西洋に対する強い憧れがしばしば指摘される一方で、日本ナショナリズムの深部に潜んでいる反近代、反西洋の思想はほとんど無視されて来た。しかし、「皇国の使命」を考える時、日本人が世界をどう捉えていたかは避けて通れないテーマである。また、「皇国の使命」の土台となっている日本人の心の奥底に潜む欧米に対する懐疑や不信感、そして、その裏返しとしての日本の文化や伝統に対する誇りと郷愁を抜きにして、教育勅語や修身復活の動きが繰り返される戦後の状況を理解することはできないだろう。

そこで、まず、「皇国の使命」というテーマがいつ、どのような形で教科書に登場するようになったのかというところから見て行きたい。

2　「国体の護持」から「皇国の使命」へ

国定教科書は戦前、５回改訂されている。（ちなみに、文部省著作の教科書は、1949年に検定教科書の使用が始まるまで戦後も出版されてい

Hosei University Repository

る。）教科によって多少の違いはあるものの、最初の改訂は、前述したように大逆事件の前後であった。その後、第一次世界大戦終結直前から戦後にかけて、国際連盟脱退後、日米開戦前（国語読本は開戦後）、そして太平洋戦争後半（国史と地理のみ）と続く。言うまでもなく、内外の様々な事情が改訂の契機となっており、程度の差こそあれ、教科書はその都度表情を変えている。

ところで、日本帝国主義の温床と目されている国定教科書だが、1910年代、20年代、それどころか30年代も含めて最も印象的なのは、あからさまな帝国主義的野心が全くと言っていいほど欠落していることである。

学校が1890年の教育勅語の発布とともにいきなり国粋主義の手先になったのでないことは、歴史研究者の間では常識となっている。実際、敗戦後の二学期の教室で子供たちが黙々と墨を塗った教科書と比べると、それ以前のものは時代を感じさせるものの、一見、拍子抜けするほど普通で、その落差に驚く人も多いかもしれない。転換点は、満洲事変あたりである。だが、この落差は、ことの展開に慌てた政府により突然もたらされたわけではない。それまで蓄積されていたものが、事変をきっかけに一気に表面化したと見るのが自然だろう。したがって、そこに至るまでの30年ほどの間の内外の動きはもっと丹念に検証されなければならない。

ハロルド・レイ氏は第一期の国定教科書と太平洋戦争中のものを比べ、日本政府が世界における日本の立場とその使命についてはっきりとした考えを打ち立てたのは1930年代も半ばを過ぎてからのことであったと論じている。[2] では、それまで文部省が何をしていたのかというと、所謂、国体概念を子供たちに徹底することにほぼ全てのエネルギーを集中していたのである。

文部省が訓令その他で多用する「光輝ある我が国体」についてここで詳述する余裕はないが、教科書での表現はほぼ一貫している。曰く、

> 御歴代の天皇は、… わが国を御家として万民をおかはいがりになり、万民もまた互に心を合はせ、天皇を国の御親とあふぎたてまつつて、忠誠を尽くし、君民一体となつて、今日に至つてゐる。これは、実にわが国体の精華で、天地と共に、いつの世までもきはまりない…[3]

Hosei University Repository

つまり、国体とは、天皇を慈愛に満ちた家長とし、国民を忠実かつ従順な子に見たてた一大家族国家であり、しかも、このユートピアのような関係が2600年も続いて日本に他に類を見ない平和と安定をもたらしたとされている。これは、勿論フィクションである。いわゆる「創られた伝統(invented tradition)」なのだが、津田左右吉も指摘しているように、日本では皇室と民衆の間に対立がなく、皇室に対する革命がなかったことは事実であった。[4] そのため、妙に説得力があり、万世不易の国体、世界に比類なき美(うるわ)しい国柄は、為政者にとっては誠に都合の良い体制維持装置となり、支配される側にとっては、そこで強調される天皇の血と人格における高貴さと相俟って、民族的誇りの源泉となったのである。新渡戸稲造は1929年の帝国議会で、日本が西洋各国に対して誇れるのは「唯国体アルノミ、若シ之ニ瑕ガツイタナラバ、我国ハ唯亡国ニ陥ルノミデアル」[5] と述べて拍手されているが、それがなければ国の存続が危ういのであるから、文部省が国体の護持に躍起となったのも無理からぬことと言えるだろう。

このように、国体の護持に必死な文部省は、「皇国の使命」については長い間ほのめかす程度で終始していた。しかし、世界の中で日本が「一等国」であり、「列強」の一つであることは強く意識しており、それを誇りとして子供たちに伝えようとしていたことは、戦前の40年にわたる国定教科書の時代を通して一貫している。したがって、30年代半ば以降、特に41年から45年が紛れもない戦争プロパガンダの時代とするならば、それに先立つ30年ほどの間は、大国意識刷り込みの時代と言えるかもしれない。そして、太平洋戦争を支え、前線で戦ったのはこの時代の子供たちであった。

ところで、満洲事変以降、「国体の護持」一辺倒だった文部省は明らかに現実の後追いを始める。大陸その他の地域で起こっていること、その結果生じた変化を子供たちに説明し、正当化する必要が生じたからである。したがって、国体思想とは異なり、後に「大東亜共栄圏構想」として知られるようになる「皇国の使命」という概念は、日本の世界支配に次の世代を備えるため周到に準備されたものというよりは、基本的に中国での戦争、そして、さらには対米戦争を正当化するため考え出された窮余の策と言えるだろう。

Hosei University Repository

事実、満洲事変以前、国定教科書は十年以上も改訂されていなかった。それが現実の変化に伴い改訂を余儀なくされ、新しい歴史教科書は「国民の覚悟」と題し、ごく簡単にではあるが、初めて「皇国の使命」にふれることとなった。曰く、「わが国は、東洋の平和をひとりで引受け、英・米両国とならんで、世界中の最も大事な地位を占めたのである。」[6] この教科書は、多くの点で、前の版をほとんどそのまま踏襲している。しかし、この誇らしげな宣言からも推測されるように、近現代を扱った最後の数ページにはそれまでにない高揚感と真剣さが漂っている。

こうして1930年代半ばに姿を現した「皇国の使命」が、学校教育の主要な柱の一つとなるのは1941年になってからである。この年、国民学校令が公布され、教育の目的は「国体の護持」から一歩進んで「皇国の使命の遂行」へと拡大する。

例えば、国民学校令施行規則には留意事項として、お馴染みの「国体ニ対スル信念ヲ深カラシムベシ」と並んで、「東亜及世界ノ大勢ニ付テ知ラシメ皇国ノ地位ト使命トノ自覚ニ導キ大国民タルノ資質ヲ啓培スルニカムベシ」が挙げられている。（ちなみに、1891年の小学校教則大綱では、「徳性ノ涵養ハ教育上最モ意ヲ用フヘキナリ」として、その第一に「尊王愛国ノ志気ヲ養ハンコト」を挙げていた。「使命」といった言葉は出てこない。）その上で、修身は「皇国ノ道義的使命」（第３条）を、国史は「皇国ノ歴史的使命」（第５条）を、そして、地理は「国土愛護ノ精神ヲ養ヒ東亜及世界ニ於ケル皇国ノ使命」（第６条）を自覚せしめることが目的とされた。[7]

こうして、「皇国の使命」は堂々と教室の中に乗り込んできたのである。新しい歴史教科書は巻頭に初めて「神勅」を掲げ、皇国の使命を「新たなる秩序を建設し、万邦をして各々その所を得しめ、もつて世界永遠の平和をうち立てること」と定義した。[8] 「ドイツ・イタリヤ両国と協力して」と前置きはあるものの、実質的に Pax Japonica を宣言したようなものである。しかも、「国威を世界にかがやかす」ことが強調され、前の版にあった「世界の平和に力を入れる」は削除されていることから、Pax より Japonica の方に重点が置かれていると考えられる。

ところで、戦争と直接結びつき、その大義名分を担う「皇国の使命」は、教科書の中では1930年代後半以降に限定される新しいテーマであっ

Hosei University Repository

たが、世界における日本の使命という概念そのものは決して目新しいものではない。[9] 以下に述べるように、文部省は、それまで主に識者の間で様々に論じられてきたものを簡潔で共感しやすい形にまとめ、日本人が国際社会との関わりの中で育んできた屈折した国民意識／国民感情に言葉と権威を与えたのである。したがって、戦時中の教科書に見られる追い詰められたような、悲壮感さえ漂う国粋主義的な「皇国の使命」の意義を理解するためには、その底流にある、この屈折した意識／感情をまず理解しなければならない。

ここでは、そうした国民感情を「脱亜論」、「白禍論」としてとらえ、それがどのように国定教科書の中に反映され、長く行間に姿を隠していた「皇国の使命」という概念がどのようにして独善的な大東亜共栄圏構想に変質していったかを見て行きたい。

3　「脱亜論」－ 一等国の使命

「皇国の使命」の下地となっているのは、植民地支配の正当化には必ず使われる「文明化の使命（civilising mission)」という欧米人にはお馴染みの考え方である。キリスト教色の極めて濃厚な概念だが、日露戦争が終る頃までには日本人の間にもしっかり根を下ろしていたと言われる。[10] 実際、キプリングが 'The White Man's Burden' と呼んだこのテーマは、レトリックもそのままに1910年の国語読本にすでに登場している。「同胞ここに五千万」と題された詩の中で、はっきりとこう宣言されているのである。

> 東洋平和の天職はかかる我等の肩の上
> 東方文明先進の任務は重き日本国
> 上下心を一にして、同胞ここに五千万[11]

この Pax Japonica の根拠となっているのは、何と言っても、「光輝あるわが国体」であった。日本が生き馬の目を抜くような国際社会の中で独立国として生き延びてこられたのは、ひとえに「世界に比類なき国体」のおかげであるとされていたのである。だが、これを別にすれば、日本人の

Hosei University Repository

使命感を支えていたのは、主に民族としての優越感であった。

日本人は日清、日露の勝利によってアジアのリーダー／先駆者としての日本を広く自覚するようになったと言われている。第一期の国定教科書が、日露戦争後のナショナリズムの異様な高まりと大衆化によって反動的な改訂を余儀なくされたことは先述した。その結果出来上がった第二期の歴史教科書は、日本が「東洋の一等国」となったことを強調して大国意識にお墨付きを与える一方で、自分で自分の始末もつけられない清・韓両国の無能さを容赦なく指摘、この二つの隣国に対する蔑視を隠そうともしていない。[12] この教科書に映し出された日本人としての自負、日本を西洋列強と対等に見なしてその他の後進国と区別しようとする意志は、第一次世界大戦後に出た第三期の教科書に見られるよりも強烈かもしれない。

また、日本は、こうして西洋並みの大国意識を育む一方で、そのパターナリズムも早々に身に付けている。だが、こちらの方は、一次大戦後の教科書により鮮明である。例えば、第三期の歴史教科書は、日本が世界の五大強国の一つになったことを繰り返し強調しつつ、韓国併合（1910）を「これ韓国が独立の実を挙ぐること能はずして、常に他国の圧迫を受け、東洋の平和を破るおそれありしが為なり。」[13] と説明している。

戦前の日本では、朝鮮半島の独立と安全は自国の独立を確保する上での絶対条件とされていた。日本にとって朝鮮半島は英国にとってのスエズに匹敵するものだったのである。当然のことながら、韓国併合についても、インドやエジプトの英国支配を正当化するのと全く同じ論理が使われている。[14] そっくり借用していると言ってもいい。すなわち、「英国の膨張(The expansion of England)」ならぬ「日本の膨張」は、韓国政府の多年にわたる失政から余儀なくされたものであり、併合は半島の民の幸福を増すため韓国民からの要望もあって行われたというのである。

記述は少ないものの、社会的ダーウィニズム等、西洋思想の影響は明らかである。しかし、日本のパターナリズムの背後にある心理はもっと複雑である。なぜなら、教科書の中国・韓国に対する傲慢な記述とは矛盾するが、「西力東漸」の圧力が日本に重くのしかかるようになった幕末以来、識者の間には、西洋帝国主義に対抗するためには「唇歯輔車」の関係にある日清両国が力を合わせなければならないという考えが根強くあり、それが日本のパターナリズムに影を落としていたからである。

Hosei University Repository

この考え方は、元々、中国に対する伝統的な畏敬の念に由来していた。しかし、日本が開国して近代的な国民国家として急速な成長を遂げる一方で、清・韓両国の改革の方は遅々として進まない。その結果、剛を煮やした日本人の間に清・韓の文明開化の意志と能力に対する不信と将来における独立維持についての不安が広がり、協同戦線を張って西洋列強に対抗しようという日清あるいは日清韓提携論から、日本が一方的にアジアの近代化と安全保障を引き受ける清韓改造委任論へと方向転換が行われたのだと言われている。[15] 福沢諭吉は、1881年には早くも、アジアで唯一の文明国として「亜細亜東方の保護は我責任なりと覚悟す可き」と述べ、[16] その4年後には、有名な「脱亜論」の中で、自己変革の出来ない固陋な国々と同一視されるのは日本にとって不幸であり、「寧ろ、其伍を脱して西洋文明国と進退を共に」すべきであると論じ、「悪友を親しむ者は共に悪名を免かる可らず、我れは心に於て亜細亜東方の悪友を謝絶するものなり」と脱亜を宣言した。[17]

地理的、人種的な親近の情などにとらわれないクールな福沢は、合理的な判断からアジアの一員としての連帯意識を捨て去ったが、大衆的なレベルで「脱亜」が進んだのは日清戦争後のことである。福沢がこの戦争を「文野の戦争なり」－文明の誘導者たる日本と文明開化の進歩を阻む野蛮な清との戦い－と呼んだことはよく知られているが、[18] 一般にも日本の正当性を疑う者はほとんどいなかった。のちに非戦論者となる内村鑑三でさえ、老大国中国にその使命を自覚させるための「義戦」と捉えていたのである。[19]

したがって、日清戦争における日本の勝利が、維新以来の血の滲むような努力の結晶と考えられたのは当然であった。ドイツ人医師のベルツは、1894年、「日本人の態度は、その大戦果からみて、模範的に冷静である。」と日記に記したが、[20] 「眠れる獅子」と呼ばれた大国に対する勝利が明治日本に与えた自負は、その国力に対する評価が高かっただけに、やはり大きかった。[21] 徳富蘇峰が後に書き記したように、この時、日本人は初めて民族としての優越をはっきりと自覚し、一国から世界へと視野を広げ、国際社会における自らの存在意義、「我か天職」を知ったのである。[22] 「我か天職」とは、列強の一員となり、近代化に成功した日本の影響力をアジア全体に及ぼし、文明国の輪を広げることであった。実際、

Hosei University Repository

リベラルな『時事新報』から保守的な『日本』に至るまで、当時のマスコミには、「東洋の天地に文明の光輝を発揚するの天職を全うする」といった論調が溢れている。[23]

しかし、日本政府が同様の文明開化の使命に燃えていたとは到底思えない。なぜなら、少なくとも教科書に関する限り、どの時期を取っても、日本の台湾統治についての言及がないからである。

かつて「化外の地」と呼ばれた台湾は、日本の植民地となって見違えるほど改善されたと言われており、その成功は植民国家としての日本の統治能力を示す格好の材料として称えられていた。[24] ところが、教科書の中の台湾は、あくまで、「天皇の御稜威」が北白川宮能久親王[25]によって体現された場所として記録されているのである。

日本の政治指導者は、なぜ、欧米諸国に倣って台湾での実績をその拡大主義を正当化するために利用しなかったのだろうか。一つ考えられるのは、彼らは、帝国主義列強から日本の独立を守るため近代国家の建設に力を尽くしてきたが、日本を植民国家としては一度も見ていなかったのではないかということである。戦前、日本人が海外領土を植民地と呼ばず、単に「外地」と呼んでいたことはよく指摘されるところである。台湾や韓国はオーストラリアなどと違って未開の地ではなかったので、あえて植民地という名称を避けたという事情もあったようだが、[26] 果たしてそれだけだったのだろうか。教科書の記述からは、言葉の本来の意味からして植民地の領有を前提とする 'Empire' は、日本人にとってはあくまでもEmperor＝天皇の支配する場所であり、天皇の御稜威の下では全臣民の幸福が約束されているので、天皇の赤子となるだけで十分と考えられていたのではないかということが推察される。こうした基本的な考え方に社会的ダーウィニズムや「文明化の使命」といった概念がレトリックとして加味され、天皇を戴く民族としての誇りがアジアの人々に対する蔑視と一体となって強化されていったのではないだろうか。

ところで、先述したベルツは、1904年の日記に、日本人は「黄色人種の指導者たらんと願って」おり、「東アジアにおけるその盟主たるの地位が、多数日本人の念頭を離れぬ」と書いている。[27] しかし、だからと言って、日露戦争後すぐに、かつての日清提携論がお払い箱になったわけではない。

Hosei University Repository

実際、中国の再生を心から願い、日清連帯の契機となる革命を待ち望んでいた日本人はたくさんいた。1911年、清朝崩壊の報に接して、嬉しさの余り、「万歳！」と叫んだ石原莞爾[28]を始め、辛亥革命には左右を問わず多くの日本人が感動し、革命勢力に同調して大陸に渡った人も少なくなかったのである。[29] しかし、成功したかに見えた革命は、袁世凱の独裁を経て、軍閥割拠の内戦状態に陥ってしまう。期待が幻滅に変わるのは早かった。武力抗争が長引く中、多くの日本人が、漢民族には自力での近代化などやはり無理なのだという結論に達し、無力感に襲われたのである。[30]

中国に対するこの幻滅、もしくは、苛立ちは、1933年、満州問題をめぐる国際連盟の会合で松岡洋右が強調した点だった。松岡は、「極東における全ての問題の根源にあるのは、中国の無政府状態である。」と全ての責任を中国に押し付け、アジアの歴史を紐解きつつ、中国は国際社会の信用に値しないと力説した。[31]

松岡は国際連盟を味方につけることができず、本来の仕事に失敗したが、1941年発行の歴史教科書は国際舞台での強気のパフォーマンスが国民の喝采を浴びた彼の論調をそっくり借用している。「昭和の大御代」と題する課によれば、支那は共和国となってからも「国内がとかく乱れがちであつた」ので、わが国は隣邦の好で何とか力になろうと努めた。しかし、謙虚さを欠く支那は、「ことごとにわが国の誠意を疑ひ、…その勝手なふるまひは日ましにつの」って行った。そして、1931年、「つひに南満洲鉄道を爆破するに至つたので、わが国は、やむなく兵を出した」のである。それから6年、残念なことに、支那には学習能力というものが欠落していたようで、かくして、蘆溝橋事件は起こるべくして起こった。こうして、「わが国は、彼の誤つた考を正し、永遠の平和を打ち立てるために、正義の軍を進めることとなつた」のである。[32]

ここに日本は遂に脱亜を完了した。二年後の再改訂版では、遠慮のない中国批判が展開されている。

> 清は自分を世界でいちばんえらい国と考へ、そのうぬぼれがぬけません。事ごとに、わが国のやり方にいひがかりをつけて、東亜の保全を、いつそう困難ならしめました。のちに、日清戦役が起こるのも、まつたくそのためであります。[33]

Hosei University Repository

4 「白禍論」— アジアの解放

「脱亜」を完成させる一方で、1940年までには「皇国の使命」の中身も変容していた。今や、神の末裔である日本民族の使命は、西洋帝国主義からのアジアの解放にシフトしたのである。

例えば、神憑りの色合いを強めた1941年版の歴史教科書は、ロシアに対する日本の勝利を踏まえて、誇らしげにこう宣言している。

> かくてわが国は、一躍世界の一大強国たることを諸外国に認めさせるに至つたが、同時に、これまで欧米諸国に圧迫されてゐた、東亜諸国の自覚をうながすことも多かつたのである。[34]

政治家の永井柳太郎は、その演説の中で、日本海海戦での日本の勝利を聞いてアジア全体の勝利と喜び、アジアを植民地というくびきから救うことが出来るのは日本だけであると確信したというインド人官吏の話を伝え、南アジアには日本をアジアのホープとしてその援助を期待する人々が大勢いると述べている。[35] 教科書の記述もあながち嘘とは言えないわけだが、日本が人間の平等という理想と大義のためにアジアの解放に乗り出したかどうかは疑問である。

そもそも、日本がリーダーとなって所謂「白禍」を撲滅しようという動きの根源には二つの心的要因が横たわっていた。一つは、国の近代化／西洋化に成功し、植民地化の運命を免れたアジアで唯一の国としての誇りであり、もう一つは、当然のようにダブルスタンダードを行使する偽善的で自己欺瞞に満ちた欧米諸国に対する義憤である。前者、すなわち、民族的優越感が日露戦争の終結以来、教科書の基調音の一つになっているのは先述したとおりである。それに対して、後者についてはあまり言及されることはないが、戦時中の教科書の核を成しており、その吟味は不可欠であろう。

この二つの心情は明らかに相関関係にある。義憤は自負心を前提とするからである。奇跡的な近代化に成功し、その卓越した民族性を密かに自負するようになった日本人は、その成果に対して当然の敬意が払われるものと期待していた。しかし、西洋人が、世界に説いて回っている理想、特に

Hosei University Repository

人間の根源的平等を実際には信じておらず、尊重する気もないことを悟るのにさして時間はかからなかった。当然のことながら、日本人の自負心は大いに傷つき、裏切られたという思いとともに、いつかは見返してやるという決意を密かに固めたのである。

こうした不満や幻滅は、1880年代にはすでに日本人の間で広く共有されていたと言われている。それは、時には個人的な経験に基づいていた。欧米での差別体験から、白人の世界支配からの有色人種の解放を心に誓った者もいれば、[36] 大川周明のように、古書店で見つけた一冊の本がきっかけで白人支配が世界にもたらした悲劇を確信し、日本の道徳／倫理に基づく世界の再構築を目指した者もいた。[37] しかし、西洋文明と西洋の良心に対する疑念は、何よりも国民の経験として、長い時間をかけ、静かに蓄積されていったのである。

まず、始めに、約40年にわたる条約改正交渉があった。アメリカ人のシドニー・ガリックは、1905年に、条約改正交渉から日本人が学んだのは、ヨーロッパの外交は正義ではなく、あくまでも国益に沿って行われ、しかも、力は正義なりという哲学に基づいている、したがって、日本の主権を尊重させ、積年の屈辱を晴らすには力の行使によるしかないということであったと述べている。[38]

そして、1905年、学習したことの正しさを証明するかのように、三国干渉が起った。日本は屈服するしかなく、平和の名において干渉してきた三国の「好意」に涙を飲んで遼東半島を手放したのである。この時、日本人は将来の日露戦争について、石川啄木の言葉を借りれば、「決心のほぞを堅めてゐた。」そして、「宣戦の詔勅の下る十年前から挙国一致してゐた。」[39] しかも、三国の「好意」に裏があったことはすぐに明らかになった。かつて、三宅雪嶺が「時に外面に於いて羊服を装ふあるも、内面を伺へば狼身ならざること殆ど希れ」と呼んだ列強による清の分割が始まったのである。[40]

かつて、岡倉天心は、「西洋人は日本人が平和な文芸に耽っていた間は、野蛮国と考えていたものである。ところが日本が満洲の戦場に大虐殺を行い始めてからは文明国と呼んでいる。」と痛烈に皮肉った。[41] 天心は、もし文明というものが血腥い戦争と不可分のものであるなら、「我々はあくまでも野蛮人に甘んじよう」と書いたが、三国干渉を経験した大多

Hosei University Repository

数の日本人は逆に、「力が足らなければ、如何なる正義公道も半文の価値もない」、[42] さらには、「国際に於ける最後の雄弁は武力なり、列国としての最首の資格は武装なり」[43]という確信をますます深めることとなるのである。

このことは、第二期の歴史教科書にすでに見て取ることが出来るが、[44] 1945年発行の高等小学校用に最も露骨に表明されている。この本によれば、長期の努力を払って歴代政府が条約改正に苦闘しなければならなかったのは、「欧米列国が、わが国を見くびり、不遜な優越感とあくなき欲望とを持して、交渉に臨んだから」であり、「条約改正の顛末」により日本人が痛感したのは、「国際問題の処理は、国家の実力に非ざれば、解決の道なきものであること」であった。[45] 近代国家としての多感な思春期を、「世界万邦皆な其膝下に慴伏し、これを賛美し崇拝し奉持せざるはなし」[46]と形容された帝国主義全盛の時代に過ごしたことは、日本にとって大いなる不幸であったと言えるかもしれない。[47]

しかし、第一次世界大戦後、国益のぶつかり合いと建艦競争の果て、自ら招来した未曾有の悲劇を前に多くの人が頭を垂れ、正義、人道に基づく新しい世界秩序の構築を唱えた。だが、日本人の目にはパリ講和会議から新しい世界が生まれる様子はうかがえなかった。近衛文麿は、「力の支配という鉄則の今も尚厳然として其存在を保ちつつある事」が会議の第一印象であったと書いている。[48] 「大国の横暴」が幅を利かせ、「力足らざる」日本の国益と意見が他の連合国ほど尊重されなかったこと、特に、人種平等の原則が連盟規約に盛り込まれなかったことに多くの日本人が不満を覚えた。

日本人がヴェルサイユ体制に見たのは、英米本位の現状維持であった。この結果に対し、日本はアングロ・サクソンの資本的侵略主義に与してはならない、むしろ、それを阻止するべきであると論ずる知識人がいる反面、[49] 感情的な反応も目立った。例えば、当時の人気雑誌『少年倶楽部』は読者にこう警告している。

> …大戦後世界は英米の天下となろうとしている。…いつまでも欧米人におさえられているのは意気地のないことである。堂々と対決し、遂には打ち勝とうとする覚悟が必要である。…領土を争った

Hosei University Repository

り、戦争をすることを考える事はない。けれども、…もし支那を米国の勢力範囲に委すようなことがあれば、黄色人種は永久に白色人種の脚下に踏みにじられてしまい、ひいては世界有色人種のすべては、白色人種に永久に頭が上がらぬ事になるであろう。[50]

こうした意見の背後には、20世紀初頭からのアメリカにおける日系移民排斥運動があったと考えられる。有色人種に対する敵意が露になったことで西洋の道義心に対する新たな疑念が生まれ、排日運動が一次大戦後も続いて激しさと広がりを増すと、日米開戦まで囁かれるようになった。もっとも、欧米列強に対する日本人の気持ちは振幅が激しく、1922年の英国皇太子来日の際には、英国人気質の気高さを称えるなど、[51] 自負（反発）と劣等感（憧れ）の間で揺れている様子がうかがえる。しかしながら、1924年、所謂「排日移民法」が成立すると、「国際の道義を無視し、帝国の面目を蹂躙する」行為に義憤の声が上がり、各地で反米国民大会が開かれ、熱気に包まれた会場では国辱記念の国民章や無名国士の墓の絵葉書が飛ぶように売れたという。[52] もっとも、こうした騒ぎにもかかわらず、人々は概して冷静で、反米感情の爆発は抑制されていたという報告もある。[53] しかし、少年雑誌には例えばこんな勇ましい広告も現れた。二年前に連載された、宮崎一雨作『日米未来戦』－「米国の横暴に奮い起った祖国を愛する熱血少年」の物語－、単行本化の宣伝である。

国辱記念日。…排日問題の決定した日、即ち５月27日がそれだ。…満天下の少年諸君！…５月27日を胸に刻みつけて忘るな。…ああ、国難来る国難来る！祖国を愛する熱血男子は来って『日米未来戦』を熟読せよ。[54]

さらに大仰な言葉が続くのだが、「国難」という言葉が何度も出て来るように、国内事情から言っても排日移民法制定のタイミングは、おそらく、最悪だった。戦後不況、政治腐敗の深刻化。1921年には首相の原敬が暗殺され、その２年後には、この世の終りの予兆のような関東大震災。同じ年には皇太子狙撃事件も起り、「国難」は流行語になった。

その後も、世界恐慌など、国難はさらに続く。そうした時に満洲事変は

Hosei University Repository

起こったのである。関東軍の目覚しい進軍ぶりに日本人は失いかけていた自信を取り戻し、高揚感のうちに居丈高にさえなっていたと言われる。[55] そして、そうした気分は子供たちの間にまで広がっていた。事変の後、小学5、6年生を集めて座談会が行われた。子供たちは、「いらざる所に」口を出す、「偏パ」な国際連盟を「世界の臆病が集まる」所と呼び、英米の利己的な日和見主義に憤慨し、「今の内閣は腰が弱い」と政府をなじり、日米戦争については、「アメリカ人は威張りくさつて居るから」、一度その「高慢な鼻をヘシ折つて」やりたい、と勇ましい。[56] 子供が言ったり、書いたりすることは注意して扱う必要があるが、この記事の見出しに「鋭い子供の認識」とあるように、大人のような遠慮のない分、ある意味正直に世相を反映しているとも言える。

こうして、英米を中心に「世界をわがものにしようといふ野心によつてつくられた」[57] 既成の秩序に対する根深い不満が、力の外交に対する根強い信仰と結びついた時、「新たなる秩序を建設し、万邦をして各々その所を得しめ、もつて世界永遠の平和をうち立てる」[58] ため、現状打破の戦争への道が準備されたのである。

5　孤立する帝国　1941 - 1945

かくして、1940年、「大東亜共栄圏構想」が発表された。しかし、これは空虚な構想であった。教科書でも、「万邦をして各々その所を得しめる」という表現は頻出するが、それが具体的にどういうことを意味するのか、一切説明されていない。その曖昧さが強みとも言えるのだが、二つの点だけははっきりしている。一つ、日本がアジアのリーダーたるべきこと。二つ、西洋文明は悪にして、白人の世界支配には終止符の打たれるべきこと。教科書はこの二点に集中して、日本を神の国、日本人を海の民として浪漫化する一方、英米を邪悪な侵略者として描くのに腐心している。

もっとも、海の民としての日本人の自己イメージは必ずしも戦争プロパガンダの所産ではない。[59] だが、海洋国家という日本の特性を前面に押し出し、「ここに生まれし十億の人の心はみな一つ、盟主日本の旗のもと…みなはらからとむつみあひ、こぞりて築け大東亜」[60] と、これをアジア支配と結びつけるようになるのは、1940年代になってからのことであ

Hosei University Repository

る。

戦時中の教師用書は、海洋国である日本が「太平洋諸地方を導き護るにふさわしい国であること」は歴史的必然であると述べているが、[61] 歴史教科書によれば、日本人の海外発展は、はるか、13世紀に遡ることが出来る。13世紀というところが重要で、教師用書に日本の「平和的進出が、ヨーロッパ人の南洋来航に先んじるものであったことを明らかにすることを忘れてはならない」とあるように、[62] この時系列がアジアにおける日本のリーダーシップの根拠になっているのである。

14世紀に入ると日本人の船ははるか南洋までも進出するようになる。そして、商船の中には熱心のあまり密輸、その他の海賊行為に及ぶものもあった。所謂、倭寇である。もっとも、倭寇とは言っても実際には日本人ばかりでなく、中には中国人やポルトガル人も含まれており、教科書は倭寇を騙る後者の海賊行為を非難する一方で、明や朝鮮が倭寇の活躍にいかに苦しんだかを誇らしげに語っている。スペインの船を襲ってその国力をそぐのに貢献したエリザベス朝英国の海賊との類似は明らかで、フランシス・ドレイクの姿とも重なる海賊行為と紙一重の活動を日本民族の盛んなことの証として称え、「南方の人々は、…勇敢でまじめなわが国民を歓び迎えて、…もつと盛んに貿易に来るよう、すすめるものもありました。」[63]と、その海外発展の平和的なことを強調しているのである。

さらに16世紀になると、「発展の意気にもえた国民は、海国魂にものをいわせて、どんな苦難をもしのぎ」、アジア各地に出向いて南方に移住する人も増え、日本人町があちこちに出来るようになる。そうした「町の人々は…土地の人ともしたしくうち交わり、事があれば武勇をあらわして、大いに国威をかがやかした」という。[64] その代表が山田長政で、彼の活躍は歌になって音楽の教科書にも載っている。[65]

止まるところを知らない国民の海外発展心の有様については、他にも様々なエピソードが盛られているが、こうした歴史を踏まえて『初等科地理』はこう主張する。

> どうみても、日本列島はへいぼんな形ではありません。アジヤ大陸の前面に立つて、太平洋へ向かつてををしく進むすがたが想像されるとともに、また太平洋に対して大陸を守る役割をしてゐるやうに

Hosei University Repository

も考へられます。[66]

その位置といい、形といい、四季の美しい自然に恵まれたこの島は、アジアのリーダー／守護者と成るべく「神の生み給うた国」であり、「海に陸にのびて行く」のは日本の運命なのである。[67]

アジアの盟主としての日本の運命を主張する論調の中でもう一つ強調されているのは、アジアはヨーロッパ人抜きで十分幸福であったということであり、その幸福は16世紀、ヨーロッパ人の到来とともに終わりを告げたということである。

アジアの不幸は、勧善懲悪劇のもう一方の主人公、悪玉ヨーロッパ人の到来とともに始まった。これは、戦時中の教科書全般に一貫したテーマである。1940年版の歴史教科書はすでに「ヨーロッパ人が東洋に侵入する」と書いていたが、[68] 太平洋戦争が始まると自制がきかなくなったのか、1943年版では、ヨーロッパ人を東洋の平穏を乱す帝国主義者の悪党として露骨に描いている。特に、本の後半ではアメリカと英国に対するルサンチマンが爆発。容赦のない強い言葉が続く。

> …海軍軍備縮小会議は、まさに、米・英が太平洋を支配しようとする下心の現われでありました。…しかも会議は、米・英の無理が通つて、わが国に不利な点が少なくなかつたのですが、わが国は、もつぱら列国の信義に期待して、寛大に事に処しました。すると、米・英の非道は、更に露骨となり、わが移民に圧迫を加へ、大正十三年、米国はわざわざ法律まで作つて、移民をこばむやうになりました。
> この間、米・英は、支那に対して、領土を尊重するやうに見せかけながら、ひそかに利益をあさりました。[69]

地理も負けてはいない。まず、白人の「わがままな統治」が長く続いた結果、アジアの住民には自由享楽の風が沁み込み、従順な気質も文化もゆがめられてしまったと嘆く。[70] （自由享楽の悪徳は西洋の独占するところである。）そしてさらに、白人と交流を持ったばかりに絶滅の危機に瀕している種族も少なくないと主張する。残酷な仕打ちを受けたうえに、白

Hosei University Repository

人の運んできた悪い病気に感染して人口が激減したからである。[71] 教科書の説明からは、誰かが阻止しなければ、白禍の広がりにより、有色人種はいずれこの地球から一掃されてしまうという警告が聞こえてくるようである。阻止する誰かが、「これまで、外国のあなどりを受けたことは一度もなく」、「世界にためしのないりつぱな国がら」を誇る日本であることは言うまでもない。実際、欧米諸国の「勝手なふるまひ」に苦しんできた東南アジアの国々では、「住民たちは、ひそかに日本の救ひを待つてゐた」のだという。[72]

そして、「日本の救ひ」はとうとうやって来た。そうした地域では、日本人は例外なく歓迎され、白人支配から解放された現地の人々は、日本の指導の下、歓びと希望に溢れて大東亜の建設に力を合わせているのである。日本はその期待に応え、白人支配が拒んできた「世界永久の平和、万邦協和の喜びを、よろづの民にわかち与えなければ」ならない、と教科書は力をこめて結ぶ。[73]

つまりは、これが日本人から見た太平洋戦争であった。「道義と美名・功利の戦い」、善と悪との戦い。善とは即ち、日本をその擁護者とする東洋であり、悪とは、アングロ・サクソンの支配下にある西洋である。[74] 「国史」を補完する形で、「修身」はこう断言する。「わが大日本は、道の国であり、義の国であります。」そして、世界平和の構築には道義を重んじる公明正大な外交が必要なことを説き、続けてこう言う。

> 他国の名誉を傷つけ、自国のためばかりをはかるのは、大きな罪悪であります。したがつて、このやうな国があるとすれば、それは世界の平和をみだすものであつて、私たち皇国臣民は、…断乎としてこれをしりぞけなければなりません。
> 大東亜戦争は、そのあらはれであります。…私たちは道義を貫ぬかなければなりません。[75]

それが、東洋の君子国日本に生まれた我々の、「世界の人々をみちびく者として」の務めなのである。

そしてさらに、国語読本が日本人の精神的な気高さを繰り返し強調し、援護射撃を行う。西洋人の利己的で浅薄、酷薄なことをそれとなく悟らせ

Hosei University Repository

ることで（場合によっては、あからさまに述べることで）、日本の「国柄の美(うるわ)しさ」を際立たせるのである。物質的な面での西洋の豊かさは明らかであったから、「精神」に向かうしかなかったわけだが、おそらく、子供たちの心には、君子国日本という自己イメージが定着し、善と悪との戦いという構図がしっかりと刻印されたことだろう。「もののふの情」と題し、感動的な小話を三つ集めた課はその典型である。中の一つ、「野戦病院にて」はバリ島を舞台にしている。日本軍は敵の野戦病院で、ひどい火傷を負い、ほとんど視力を失ったアメリカ人将校を発見する。衛生兵が夜となく昼となく心のこもった看護をしてやると、この敵の将校は、月明かりの中、さめざめと泣いて言うのである。「…あなたがたが、私に示されたしんせつとあなたがた同士の友情のうるはしさに、しみじみ感じて泣ゐてゐるのです。かうした温かい心は、アメリカの軍隊には決してありません。私は日本の軍隊がつくづくうらやましくてならないのです。」[76]

文部省は教科書全体を通して、弱肉強食を正当化し、あくなき物欲を刺激して国家間の競争を招き、揚句に「世界を修羅道に陥れた」西洋文明を倒し、東洋文化を興隆して新しい「道義的世界の確立に寄与」するために日本は戦っていると主張しているのである。[77] しかし、これは必ずしも文部省のオリジナルではない。こうした意味での東西対決は以前から予想されており、実際、日米開戦をこの枠組みで捉えた人は少なくなかった。例えば、京都学派の論客たちは、太平洋戦争を「東洋の道徳と西洋の道徳との争い」、いわば、「世界観の戦争」であると定義している。偽善的かつ利己的、まさに「盗人たけだけしい」としか言いようのない西洋の世界観の上に立った矛盾に満ちた秩序に、健康な日本の「モラリッシェ・エネルギー」（道義的生命力）が反撃を加えたのである。[78]

しかも、江戸末期以来の歴史経験が示しているように、こうした対立意識は広く日本人に共有されていた。そして、恒久的な世界平和を確立するためには、いずれ、東の雄である日本と西の盟主である英・米が衝突することは避けられないだろうと内心了解していたと言われる。[79] だからこそ、1941年12月８日の日米開戦に、ほとんどの日本人は、「来るべきものがとうとう来た。」と、興奮を覚えたのである。[80] 戦時中の国語読本には「12月８日」と題する課があって、開戦の朝、心が湧き立つのを感じながらも不安顔の子供たちを前に、校長先生が、どこまでも非道な英・米に対

Hosei University Repository

し、日本はとうとう立ちあがったのだと説明し、「私たちは、もうとつくに、覚悟がきまつてゐたはずです。」と訓話する姿が描かれているが、[81] 作家の伊藤整も日記にその日の感激をこう書き残している。「我々は白人の第一級者と戦う外、世界一流人の自覚に立てない宿命を持っている。はじめて日本と日本人の姿の一つ一つの意味が現実感と限りないいとおしさで自分にわかってきた。」[82]

日露戦争以来、教科書は、日本が、地理的には東洋の一角を占めているが、実質的には西洋の文明国の一員であることを密かに自負し、アジアの他の諸国とは一線を画そうと努力してきた。ところが、1930年代の終わり頃から次第に西洋文明を諸悪の根源のように非難し、そのマキャベリズムがいかに世界を翻弄してきたかを強調、世界を苦悩の淵から救い、東洋の倫理に基づく新秩序を確立することこそ道義国日本の世界的責任であると力説するようになる。しかし、アジアの解放と言いながら、西洋の世界観に対するアンチ・テーゼとして提出された大東亜共栄圏構想は核心の所で西洋帝国主義の論理に支えられており、その価値観を共有していたのである。民族協和を唱えてはいたが、日本が実際に目指していたのは、意識していたかどうかは別にして、アジアの守護者になることではなく、自己の利益を守るため、白人支配に取って代わることだったと言えるだろう。結局の所、教科書の中に見えるのは、東洋に回帰したように見えて、その実、否定したはずの西洋の価値観に縛られている日本の矛盾した姿、その自家撞着の果てに東洋からも西洋からも孤立する日本の姿である。

6　おわりに

正義の仮面をかぶった不正義に道義国日本は勝利するはずであった。しかし、そうはならなかった。だが、敗戦の事実にもかかわらず、正しい側＝「道義国」日本はおそらく負けなかったのだ。なぜなら、少なくとも日本人の気持ちの中では、国体とそれを支える「美(うるわ)しい国柄」は護持されたからである。八月の終わり、新しい文部大臣がラジオから少国民にこう呼びかけている。

これから一層、天皇陛下の有難いことを悟つてその仰せによく従

Hosei University Repository

ひ、思し召しのままに動くことです。今度のやうな戦のやめ方は他の国では真似の出来ないことで、如何に昨日までみんなが一心不乱に敵と戦つても、一度び天皇陛下の御仰せがあつて戦を止めよと仰れば、みんな文句はなしにやめてひたすら陛下のみことのりに従ふ、これが日本の国柄のよいところであります。[83]

日本人は、負けたのは間違っていたからではなく、努力が足りなかったのだと考え、天皇に対し一億総懺悔したが、日本を美(うるわ)しくしている（と信じている）価値観が否定されたとは考えなかったのである。

太平洋戦争には民族主義戦争という側面があったが、民主主義対ファシズムという構図の影に隠れてあまり吟味されることはなかった。[84] 日本の民族主義が十分な議論も反省もないまま生き延びることとなった理由のひとつはそこにあると思われる。ナショナリズムは取り扱いのむずかしい問題だが、この点について、さらなる研究が期待されるところである。

注

1　H. V. S. ピーク *Japan Daily Mail* 1904.8.5 『教育公報』 第８巻第289号　pp.37-39

2　H. J. Wray, 'A study in contrast: Japanese school textbooks of 1903 and 1941-5' *Monumenta Nipponica: Studies in Japanese Culture* vol.28 part I (1973)

3　文部省『尋常小学国史』下巻（1935）海後宗臣（編）『日本教科書大系－近代編』（講談社 1978）第20巻　p.119　以下、『教科書大系』と略す。なお、旧漢字は新漢字に改めた。

4　津田左右吉「学問の立場から見た現時の思想界」『津田左右吉全集』第23巻（岩波書店 1965）pp.80-136 もっとも、こうした事実を稀有なこととしてとらえるのは、君主は専制権力をふるうものであり、民衆と対立するものであるというヨーロッパの思想に基づいていると、津田は述べている。

5　社会問題資料研究会（編）『帝国議会誌』第１期　第２巻（東洋文化社 1975）　p.451

6　文部省『尋常小学国史』下巻（1935）『教科書大系』第20巻　p.121

Hosei University Repository

7　文部省「国民学校令施行規則」 1941.3.14 文部省令第４号 『続現代史資料』第９巻（みすず書房 1996）p.284

8　文部省『小学国史』下巻（1941）『教科書大系』第20巻　pp.234-235

9　松本三之介「国民的使命観の歴史的変遷」『近代日本思想史講座』８（築摩書房 1961）　pp.83-136　以下、『思想史講座』と略す。

10　岡義武「国民的独立と国家理性」『思想史講座』 p.46

11　文部省『尋常小学読本』巻11（1910）『教科書大系』第７巻　p.227

12　文部省『尋常小学日本史』巻二（1911）『教科書大系』第19巻 pp.608-616

13　文部省『尋常小学国史』下巻（1920）Ibid.,　p.727

14　J. R. Seeley *The Expansion of England* (1883), Benjamin Kidd *Social Evolution* (1894), Sir Charles Lucas *The British Empire Six Lectures* (1915) など。

15　岡義武　op cit.,　pp.18-20

16　福沢諭吉「時事小言　第4編　国権之事」『福沢諭吉全集』第５巻（岩波書店　1960）　pp.186-187

17　福沢諭吉「脱亜論」（1885）　Ibid., 第10巻　p.240

18　『時事新報』1894.7.29

19　内村鑑三「日清戦争の義」（1894）『内村鑑三著作集』巻２（岩波書店 1953）pp.24-33

20　トク・ベルツ（編）『ベルツの日記』（上）（岩波書店　1979）p.171

21　松本三之介　op cit., pp.83-85

22　徳富猪一郎『大正の青年と帝国の前途』（民友社　1916）pp.238-239

23　岡義武　op cit., p.44

24　Alfred Stead *Great Japan: A Study of National Efficiency* (London 1906) Chapter 18

25　北白川宮は、日清戦争後、治安維持のため近衛師団を率いて台湾に赴き、抗日運動の鎮静化に当たったが、マラリアのため現地で没した。

26　木畑洋一 'British and Japanese Colonial Rule in Comparison' *The Proceedings of the Department of Foreign Languages and Literature, College of Arts and Sciences, the University of Tokyo* vol.XLII no.3 pp.56-74

Hosei University Repository

27 トク・ベルツ（編）op cit., pp.367-368
28 石原莞爾「満州建国前夜の心境」（1932）『現代史資料』第11巻（みすず書房 1987） p.68
29 「日本の運命」（1）『世界』第50号 1950年2月 pp.65-66
30 石原莞爾 op cit.
31 Japanese Delegation to the League of Nations, 'Supplement to the Manchurian Question' *The Manchurian Question Japan's Case in the Sino-Japanese Dispute as presented before the League of Nations* (Geneva 1933) p.14
32 文部省『小学国史』下巻（1941）『教科書大系』第20巻 pp.229-233
33 文部省『初等科国史』下巻（1943） Ibid., p.354
34 文部省『小学国史』下巻（1941） Ibid., p.223
35 永井柳太郎「世界をして全人類の世界たらしめよ」（1918）『永井柳太郎氏大演説集』（大日本雄弁会 1924） pp.71-75
36 Peter Duus, 'Nagai Ryutaro and the "White Peril" 1905-1944' *The Journal of Asian Studies* vol.XXXI no.1 November 1971 p.44
37 「大川周明尋問調書 第一回」（1933. 4. 17 市ヶ谷刑務所にて）『現代史資料』第5巻（1982） pp.682-690 大川にとって転機となったこの本は、Henry J. S. Cotton, *New India, or India in Transition* (1885) である。Sir Henry は英国人。
38 Sidney L. Gulick, *The White Peril in the Far East* (1905) pp.46-54
39 石川啄木「大硯君足下」（1911）『明治文学全集』第52巻（筑摩書房 1970） p.265
40 三宅雪嶺『真善美日本人』（1891） Ibid., 第33巻（1967） p.212
41 岡倉天心『茶の本』*The Book of Tea*（初版 N.Y. 1906）（桜庭信之訳）Ibid., 第38巻（1968） pp.122-123
42 徳富猪一郎『蘇峰自伝』（中央公論社 1935） p.310
43 『国民新聞』1895.6.1
44 文部省『尋常小学日本歴史』巻二（1911）『教科書大系』第19巻 pp.612-613
45 文部省『高等科国史』（下）（1945） pp.112-113
46 幸徳秋水『廿世紀之怪物帝国主義』（岩波書店 1970年版、初版

Hosei University Repository

1901） p.15
47 丸山真男「明治国家の思想」『戦中と戦後の間 1936-1957』（みすず書房 1976） p.243
48 近衛文麿「講和会議所感」岡義武『近衛文麿－「運命」の政治家－』（岩波書店 1972）所収 p.15
49 福田徳三「資本的帝国主義を排す」『黎明録』（佐藤出版部 1919） pp.278-307
50 『少年倶楽部』第７巻 ３号 1920.2月 p.73
51 Ibid., 第９巻 ５号 1922.5月 p.22
52 『東京日日新聞』1924.6.6（夕刊）、1924.7.2 など
53 『教育時論』1403号 （1924.6.5） p.1
54 『少年倶楽部』第11巻 ８号 1924.8月 p.297
55 土橋勇逸「国際連盟脱退管見」（1957）『現代史資料』第11巻（1987） p.882
56 『アサヒグラフ』第18巻 １号 1932.1.1 pp.22-23
57 文部省『初等科修身』四（1943）『教科書大系』第３巻 p.492
58 文部省『小学国史』下巻（1941） Ibid., 第20巻 p.234
59 文部省『うたのほん』（1941） Ibid., 第15巻 p.484「われは海の子」（初出 1911）参照
60 Ibid., p.468
61 文部省『初等科地理(下)－教師用』（1943） p.172
62 文部省『初等科国史(上)－教師用』（1943） p.244
63 文部省『初等科国史』下巻（1943）『教科書大系』第20巻 p.299
64 Ibid., pp.324-325
65 文部省『初等科音楽』２（1941） Ibid., 第25巻 p.452
66 文部省『初等科地理』(上)(1943) Ibid., 第18巻 p.8
67 Ibid., p. 9
68 文部省『小学国史』上巻（1940） Ibid., 第20巻 p.200
69 文部省『初等科国史』下巻（1943） Ibid., p.366
70 文部省『初等科地理(下)－教師用』（1943） p.84-85
71 文部省『初等科地理』（下）（1943）『教科書大系』第17巻 pp.96-97
72 Ibid., p.56

Hosei University Repository

73 Ibid., p.99
74 文部省『初等科国史－教師用』(上) pp.189-190 及び(下) pp.217 & 260-261
75 文部省『初等科修身』巻3(1941)『教科書大系』第3巻 pp.454-455
76 文部省『初等科国語』8 (1943) Ibid., 第8巻 pp.697-698
77 文部省『臣民の道』(1941) pp.3-20
78 「世界史的立場と日本」「東亜共栄圏の倫理性と歴史性」「総力戦の哲学」全て『中央公論』に掲載。順に、1942年1月、同年4月、1943年1月
79 広松渉『<近代の超克>論』(講談社 1989) pp.158-161
80 「東亜共栄圏の倫理性と歴史性」 p.122
81 文部省『初等科国語』6 (1943)『教科書大系』第8巻 pp.600-601
82 伊藤整『太平洋戦争日記』(一)(新潮社 1983) p.11
83 『朝日新聞』1945.8.28
84 John W. Dower, *War without Mercy, Race and Power in the Pacific War* (N. Y. 1986)